あとがき

昭和五二年六月、私は山形新聞・山形放送主催の海外取材番組「紅花の道」の取材旅行班に同行し、ベニバナの原産地とおぼしきインド、アフガニスタン、エジプトの三カ国を足ばやに見て歩いた。

私の専門は果樹園芸学で、作物学でも、植物分類学でもない。その私が、この取材旅行に出かけることになったのは全くの偶然で、参加予定者の思わぬアクシデントから代役をつとめるはめになっただけのことで、いわば「しろうと」のにわか参加であった。それまでベニバナなるものは、どこかの畑で二、三回見たことはあったが、その歴史的な背景などは全く知らなかったのである。

そのいきさつのあらましはこうである。私は昭和四九年に約一年間カリフォルニア大学農学部に在外研究員として出かけたのだが、現地では広大なベニバナの畑を見、また同じキャンパスの作物学科に著名なベニバナ研究者のノーレス博士のおられることを知った。

帰国後、当時の農学部長（沢田教授）から、ある日突然「山形新聞の八大事業の一つとしてベニバナの海外取材をやることになった。わが農学部から誰かを派遣してもらえないかとの打診があったが、君、行ってみないかね」と話があった。

あまりに突然なのと、ベニバナ取材とのことで、お断りしたのであったが、その際、ついノーレス博士のことを口にしてしまった。「それならば、取材旅行はダメでも、一体、どの国に出かけたら原種を見ることができるのか、君、聞いてくれないかね」といわれ、そのくらいのことならばと、ノーレス博士あて早速手紙を書いた。

しかし、ひと月くらい待っても返信きたらずであった。おかしいなとばかりに、四九年に私がお世話になった果樹の教授に、ノーレス教授はどうしたのか、これこれのことを聞いてほしいと手紙を書いたところ、「ノーレスは昨年退職して大学にはいない。彼の論文コピーを送る」という返事が届いた。すぐに彼の論文を読んだ。

それやこれやしているうちに、再び学部長から取材に同行するようすすめられた。

「果樹の専門の者が、世をあざむいてベニバナ取材では申し訳ないと思うのだが……」と渋りつつも、内心はスポンサーつきの海外旅行ができることに私の心は躍った。そして、ついに承諾するはめとなったのは、予定していた植物学者の結城先生が御高齢の上、御家族の反対があって同行できなくなったことと、「ベニバナ取材に限らず、果樹など園芸作物を広く取材の対象とすることでよい」という条件がつけられたからであった。

取材も何とか無事に終り、放送もどうにかうまくいって、ほっとした頃、私はやはり良心の呵責に悩まされた。犬も歩けば何とやら、しろうとの私でも、まだ見ぬ国をめぐり歩けばそれなりの収穫があって不思議はない。しかし、それを文章に書き残そうとすると、私の専攻分野

が邪魔になった。ほとぼりの冷めるのを待って、いつかは、ことのいきさつとおわびを書かなければと今日まで思い続けてきたのである。

同行の一人真壁先生は、取材旅行のあと、まるでほとばしるように筆を走らせ、幾つかの価値あるベニバナ関係の著作を残して下さった。先生の著書の中に、しろうとの私の名前が時々登場して、読むたびに冷汗をかくのだが、真壁先生は私をあたたかく擁護するかのように、上手に文中に引用して下さっておられた。その思いやりには頭の下がる思いであった。

何か私とても書き残さなくては真壁先生に申し訳ないのである。さりとて、私にできることは何もなく、筆をとる気力もにぶった。どういう風の吹きまわしか、昨年、あるテレビの関係者から、海外取材で入手したベニバナのタネや花が送られてきた。私のできる範囲で、顕微鏡を使って花粉や種皮を調査し協力申し上げた。

にわかに紅花(いろ)めいた私は、以前に「ベニバナ研究ノート」として作っておいた私の野帳に、これまでの調査結果の一部を折り込んで、今回、ささやかな小冊子を編集してみた。いうまでもなく、これはしろうとの単なる観察ノートにすぎない。気軽にお読みいただけたら私としては満足である。

なお、この小冊子を作るにあたっては、多くの方々の文献・資料を引用させていただき、原稿整理や図表作製には五十嵐技官の力をお借りした。ここに、心から厚く御礼申し上げる次第である。